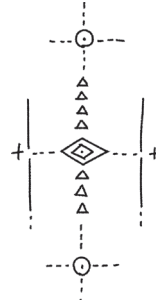


COSMOS集



大野 英子選

「あすなる集」特選

雪の便り

青野 多都留 北海道

青なんばんはねちり曲がれるひたすらに今を生きぬることの切なさ
 南瓜から抜けなくなつた包丁のやうなり夫もわれもきさきさ
 黄の粒が真つすぐ整列透き間なしトウモロコシは律義の王者
 雪虫が雪の便りを知らせをり野菜の片付け多忙なる午後
 終戦後の食料不足を助けくれし芋、南瓜なほ大好物なり

迷はずに買ふ

本田 初江 群馬

とんとんとスマホをたたく指先が夫の病の癒えたるを告ぐ
 静かなる夫の寝息を確かめて朝日歌壇をじつくりと読む
 とろとろと南瓜の甘みがとけ出して今夜の夫は食欲旺盛
 湯沸器(押せば湯が出る)はわからぬか若き店員ポットへと誘ふ

千の双葉

吉弘 藤枝 埼玉

暑くても今はもう秋テレビより「風の盆歌」聞こえて来たり
 軒をつらね盆の提灯点された八尾諏訪町幻にたつ
 なつかしき「風の盆歌」聞きながら逝きて十年の夫を思ふ
 雨上がりの朝の畑に大根の千の双葉のみどり輝く
 塀の上に今日も三毛猫がねてをりぬそのみ通ふ風のあるらし

水のこゑ

福島 健太郎 神奈川

ミントマト箸よりこぼれ嬉々として床に弾めりわれより遁れ
 争ひし翌朝にするアイサツは痕跡を消し水のこゑにて
 結び目は緩くしあれどほどげずに保ちてをるや 蕎麦でも茹でん
 酷暑日に耐へひねもすを籠りをり 命かがやく夏などなかつた
 太陽を捉へてハウス栽培の一点輝く音消えし昼

瑠璃色の傘

荒川 ゆみ子 東京

朝顔の蕾の螺旋ほどこやうに瑠璃色の傘空に広げる
 引つ越した我が家の跡で夫友のクレアはいつも止まると聞きぬ
 開け放ち麻蚊帳だけに守られて父の生まれた家で眠れり
 ビターチョコほんのり混ぜたケーキ焼く 息子がお嫁さん連れてくる
 国産みの神話のやうにケーキ生地木べらにすくつてぽつたり落とす

水上 美季選

カラフルな靴

本土和子*東京

ゆるやかに甘き香りのメロデーが流れる先に金木犀さく
親子熊三頭駆除と見出しある新聞記事をわれは読み得ず
街を行くカラフルな靴気になりぬ真つ黒な靴もとめ帰る日
柿の木で鳥はちゆうちゆう囀りて猫のゆずちゃんぴょうぴょうと呼ぶ
カレンダー残りは二枚破り捨てし月日まるめて転がしてみる

我にもあつた

佐藤彩湖*新潟

「あつたんですか？」真顔で生徒聞くけれど十五の時は我にもあつた
生徒らは絶対知らぬこの言葉使つてみます「すつとこどっこい」
我が家には犬いなければよそ様の散歩の犬の背中撫でたし
わたくしの腕を朝晩握りしめ唸り声上ぐ血圧計は
ヤゴたちは我が家の池に引つ越して隣の池の修理始まる

ルームプレート

高橋梨穂子*新潟

雨の日は散歩をしない生活が続いた祖父の過去の雨傘
心臓の止まったからだに重くないようゆつくりと花々を置く
胸の百合あふれないよう慎重にみんなで閉めた純白の蓋
足どりは軽いだらうか傘持たず小雨のなかをゆくたましいよ
ぴんと背を伸ばし(高橋惣蔵)のルームプレート片づけるひと

あちこちに向く

小森鈴子*岐阜

コルセット取れて散歩は十五分はつかなる風秋の気配す
紅き蕊椀のかたちにならばせて彼岸花さく夕陰のなか
樂しげにあちこちに向く孫の靴ならべて出でぬ朝刊とりに
スピードを落として夫と眺めたり新婚のころに住みたる家を
中村哲氏のごとく尊き生きざまを報ずる番組を見たしと思ふ

同居人さん

時田泰子*静岡

呆気なく逝きたる友の好きな花薄紅の玉すだれの花
一人辞めまた一人辞め毎月の歌会踏ん張る歌姫四人
新しき色鉛筆に画家気分脳トレぬり絵の葉書に挑戦す
壁に動く大きな蜘蛛と目が合いぬ「同居人さん、見守りたのむ」
昨日まで茶髪色なる裏の田が今日はすつきり毬栗頭

小田部 雅子選

素足

稲吉裕子*愛知

助詞ひとつに振り回されている夕べ猛暑の疲れいまだとれざる
霊園のあずまや早朝の飯を食む禪僧四人の素足が覗く
ことば交わししのち空仰ぐ青年の切れ長の目のすずしき記憶
打ちのめされし心徐々にと戻りゆく野茨赤きが目に沁みる頃
十月の風にひかりを結びびる穂すすきの村チャイム鳴りいず

大上宇市 高野哲司 兵庫

ポントクタデの「おひとりさま力」強きことずしりと生ふる井戸のほとりに
ほつほつとアラススキの咲き出でて教へてくれる「もう秋ですよ」
千草への探求心が開花する大上宇市の植物図譜重し

醤油の香たつぷり吸ひてアオイゴケ二見の路地の主となれり
顔施とふ言の葉さへも芽吹きゆく播磨の熊楠宇市の図譜よ

「お父さん」 田中みどり 兵庫

中空に轟音を吐く那智の滝鯉の口して夫の名を呼ぶ

自立とぞ風吹きあれて刀自我の刃で切る茄子のむらさき深し

「お父さん」フランク永井指して言ふ子らの父ある倫敦は朝
煙草の香みやげの如きを懐かしむ新幹線の受動喫煙

渡されて煙草の香する夫の衣を富士の冠雪聞きつつ吊るす

重かつただらう 藤本勝子 兵庫

猛暑日の続きし今年の稲穂なり丈はみじかく小粒のおほし
空の雲、風をうけつつ野良仕事なせるは楽し秋に入りたり
秋彼岸「花東やで」と姪が持ち来 三木市の特産大菊、小菊
一本の木に六百個生りし柿よ重かつただらう秋は深まる

四日間の剪定終へたる植木屋が「来年来れるや」帰りゆきたり

〈御湯〉 友田昌子*奈良

神無月九日ま昼 神判の〈御湯〉はじまる於美阿志神社

神主は白い羽釜のたぎる湯に米と新酒をそそぎ込みたり
笹の葉をたぎる湯につけ神主はお祓いをする村びとたちに

夕の陽が甍をてらすみやしろよ千三百年前のかげやき
火の色に野辺を染めゆく藪萱草夕べ焦がれて待つ人あらん

原賀 環子選

蟬の子 井上喜美子*山口

仏飯で作りし粥に梅のせて食欲なき日の命を養う

この頃は病院に行く日多くなる今日は手の棘抜いてもらいぬ
夜半見覚めつぎつぎ頭ちくる雑念を振り切るように水を飲みけり

空蟬がいくつも残る木の枝や いか生きしか今年の熱暑を
脇の木に辿りつけない蟬の子の脱皮したるは丈低き草

蠍座歌会 高見艶子 愛媛

午前二時スーパームーンに別れ告ぐ八十五歳の生を感謝し
クツワムシ煩く聞きし日は遠くこの山峡を去る日近づく
蠍座がくつきり見ゆると友等呼び歌会なしたる若き日恋ほし
アンタレス大きく輝き老いなどは心に無かりし友との集ひ
運転を危ぶむ子等に逆らへず想ひ出多きこの村去らむ

街並み 江崎玲子*福岡

夕映えの天空のもと点描の明かりを灯す高層マンション
秋の陽を浴びつつきりきり舞う一葉蜘蛛の一糸に掴まりており

星月夜白くかがやく天文台 母が誘う彼岸の母が
昭和初期昭和後期平成の街並み眺め渋滞にはまる
災害用備蓄食糧食べつくしようやく迎える年金支給日

隠岐の島 福田春子 福岡

水脈曳きて漁船一艘かへり来ぬ隠岐西郷さいごうの港の九月
隠岐の島西郷の宿は夕日影、入江の船瀬に船は舫へり
牛放す隠岐西の島馬もゐてそのたてがみを風に靡かす
目ざめれば岬はふたつ向ひ合ふ隠岐西の島夜明けは早し



ツアー客となりて訪ひたる隠岐の島の、この島形しまがたを少しく知りぬ
ちぎり絵 石本洋子 佐賀

誰も来ぬこの連休は夫とゐて敬老の日の祝ひ飯食ぶ
失語症の夫が声出し新聞を読むはリハビリ、われも付き合ふ
真白なるゴルフボールを庭へ投ぐプレーせし日の夫に戻れと
ぼつぼつと浮きたることく彼岸花咲きてふるさと赤きちぎり絵
真つ白きレースカーテン黄に染むる今宵八時の月の不可思議

水上 比呂美選 「その二集」特選

脚をそろえて 成田裕子*青森

部屋少し自分を少し整理してみたくて捨てて雑誌とノート
子育てに失敗したか亡き母に問うあまりにも片付け下手で
ばつばつとフロントガラスを叩く雨我を鼓舞するドラムのように
いち早く真つ赤に染まるうるしの葉その名を君がおしえてくれた
まっすぐに脚をそろえて鷺が飛ぶ白き矢じるし空に描いて

三年分のわたし 工藤玲音*岩手

三年前買ったコートを羽織るとき三年分のわたしも羽織る
ハロウィンの仮装売り場はきらめいてここは自分でいられない国
寝ているようなあなたの写真目を閉じてあなたが自分を撮った写真だ
絆創膏売り場思ったより広くわたしの傷をしばらく選ぶ
まっさらな紙飛行機が落ちていて現実がうそみたいでこわい

止め石 榛原みよ子*埼玉

夕まぐれ炎夏の終わりを待つ如く雛子の稽古が月に飴す

朝の陽の銀の光を織り込んで蜘蛛の囀りとつ晩夏の空に
あまりにも季の移ろい早すぎてわーんと消えたひぐらしの声
昼と夜同じ長さの境目に止め石置かれまた読む続き
際のなき青天見れば不意をつくちぎれたような半月の白

今宵はラジオで

秋 山 幸 子 千 葉

遠き空またたきひらく花火ありて夏の暑さがやはらぎゆきぬ
この夏に梅の古木が枯れゆきて寿命といふにはあまりにはかなし
カセットに詰め込み聴きしバカラック今宵はラジオで懐かしく聴く
木賊にてブランコの錆び落とし日われの幼き秋の夕暮れ
三年も帰らぬ母へ手紙書きて出しに行かうか黄泉平坂へ

昔のままの茶房

富 永 弘 東 京

ドア閉まる電車にえいと駆け込みぬ急ぐ用なき老い人われは
道玄坂ゆつくりのぼる名曲を聞かせる茶房今もあるかと
百姓を継げとも母は言はざりき百四歳までのんきに生きて
ひとり来てシューマン聞きぬ何人か眠れる昔のままの茶房に
玄関のセンサーわれの姿見て勝手にまぶしき灯をともしたり

大松 達知選

後 ろ 前

権 田 陽 子 静 岡

くやし涙こらへこらへて花道をもどる楽日の熱海富士なり
耳元をくすぐるやうにボサノバのさざ波たちて秋の身にしむ

夕日さす厨に流れるボサノバにうる覚えなる歌詞くちずさむ
香水は使はれぬまま琥珀色に時を溶かして澱となりたり
後ろ前にセーター着たる心地するAIの読むニュース聞きたび

幻 の 蝶 池 田 あつ子 愛 知

中秋の月見の宴の琵琶奏者にしへびとのごとく奉ずる
うたげ果て満月高しざわざわと流れ散らばる人波の上
月光に幻の蝶舞ひてをり殺めたる青虫の数だけ
ぽつねんと遺る半紙の三千枚手習ひされてこそその半紙か
三千の白紙捨てては耐へ難く筆もて書きぬ下手は下手なりに

ま ない ぬ 岩 館 澄 江*愛 知

ていねいにTODORISTをつくるきみ 私たちもうがんばらないよ
一ヶ月とおく離れたまないぬに再会したらまだ好かれてた
全身でしなだれかかるとまないぬの腹をさわればおまたもひらく
カタカタといい音たてて文字を書くだけで私はいいい仕事人
子作りにロマンチックが必要だなんて神様遊びすぎでしょ

マーブルチョコ 小 田 沙也加*愛 知

金木犀の香りに形あるとしてひそかに鋭いだろうその縁
歳上の人から届く(様)付けが皮膚をそわそわ這ったりしている
水飴のたらたら落ちて忙しくあれば考えなくて良いこと
すれ違う誰かの父のポケットにマーブルチョコを見る昼下がり
マーブルチョコ、チョコボール、ドーナツポップ小さい口の娘のための

その先の闇 大池 アザミ*兵庫

小さな文字 白井玲子 佐賀

引越しをするなら捨てるものたちに囲まれている今の生活
ぶつつりと会話はときれ夕風に放り出された二隻の小舟
つじつまを合わせるように夕暮れになってようやく用をすませる
目が覚めて身体の節に痛みあり知らない街を旅して来たよう
やめるとか捨ててしまえば軽くなる気がするけれどその先の闇

鈴木 竹志選

無人の店 原 万紀 長崎

手編みの膝掛け 浦 木 妙 子*鳥 取

白菜を切りつつ夫の愚痴言えば「わかる」「わかる」と仲間頷く
昨日とはうって変わった夜の冷えに母の手編みの膝掛けを出す
白寿なる母編みくれし膝掛けは白が基調のモチーフつなぎ
大空に吸い込まれるほど晴れた日にぎつくり洗うパリパリタス
寄り添って子を抱き帰る息子らの傘にやさしき秋雨の降る

大 道 芸 松 岡 綾 子 香 川

ムンクの叫び 小森田 より子*熊 本

苦や不幸受けとめきるべしとふ説法千の鈴虫鳴く寺に聴く
老練の大道芸に魅了さるゆるい会話と火を吹くスリル
投げ銭を入れる帽子に札多し五百円玉財布にもどす
をさな鬼のひつ張る芋の蔓のした腹に子をもつかまきりのそり
会話なき食卓今宵は阪神の「アレ」で沸きたちビールを追加

青紫蘇に散水すれば競ふがにバツタ跳び出し緑の弧を描く
夏物のカラリと乾く幸を得て木犀の香も共にたみ込む
早生みかん買ひ百円が箱に鳴るコスモスの咲く無人の店で
病む夫がびつたれおどしに厚着する十月二日虫の声絶ゆ
断捨離の姑の行李の奥底に四人の姉の足袋の型紙

首かしげ川面にただよう白鳥のごとき発泡スチロール一片
「ウンマツ」と言いてほおばるカラアゲの言い得て上手し孫の食リポ
潤いを足さんと夜の顔パック ムンクの叫びに見えて泣く孫
疲れてる友にファイトのスタンプをやめて四つ葉の動くを送る
早送りしているような一年が二倍速から三倍速へ